

5 シンポジウム 日本仏教研究

# 日本の仏教

法苑館

日本仏教研究会編纂

1995

# アメリカにおける日本仏教研究

ジタクリン・ストロム  
(前川健二訳)

この十年の間に、アメリカ・カナダにおける日本仏教研究は長足の進歩をした。おぼかなべーリジ数で、そうした発展のすべてやそれに貢献したすべての学者に言及するに不可能である。以下に述べるのは、最近の動向についての簡単な見取り図にすぎない。また、私自身の方法論的な立場からして、日本仏教の哲学的研究よりも歴史学的研究に主として焦点をあてることになる。すぐれた業績を挙げながら、スペースの関係上、ここでは言及しなかつた人々に、衷心からおおむね申し上げたい。

この十年の間に、アメリカ・カナダにおける日本仏教研究は長足の進歩をした。おぼかなべーリジ数で、そうした発展のすべてやそれに貢献したすべての学者に言及するに不可能である。以下に述べるのは、最近の動向についての簡単な見取り図にすぎない。また、私自身の方法論的な立場からして、日本仏教の哲学的研究よりも歴史学的研究に主として焦点をあてることになる。すぐれた業績を挙げながら、スペースの関係上、ここでは言及しなかつた人々に、衷心からおおむね申し上げたい。

最近のアメリカにおけるこの分野の研究で最も顕著な特徴をあげれば、それはより広くコンテクストを問

「仏教」と「神道」

日本仏教をその文化的・歴史的・制度的コンテキストの中で研究しようとした結果、次第に明らかになってきたのは、仏教をそれだけ単独にとりだして扱うことはもはや不可能であり、ほかの宗教形態との相互作用をふまえて考察しなければならぬ、ということである。そのような考えから、「仏教」と「神道」との関係进行研究しようとする努力が見られるようになった。そこでは、そもそも近代以前において仏教と神道をどの程度にまで別個なものとして正当に語りうるのか、ということが問題となつていのである。ニール・マクアリン (Neil MacAuliffe) が書いているとおり、「仏教と神道は制度的・儀礼的・教理的に融合しており、それらを別個の互いに独立した伝統として扱うことは、近代以前の日本の社会構造を誤つて描出すことになる」(一九八九、五頁)。この問題に関連して、神道が統一された伝統ではなく、各地の「カミ」を祀ることから皇室の儀礼とイデオロギに至るまでの幅を持つたさまざまな現象である

ることが認識されるようになった。

仏教と神道の相互作用を考え直す上でとりわけ注目しているのは、アラン・G・グラバート (Alan G. Graubert) の著作である。グラバートは仏・菩薩と神道の神と神との関係を「結合」(combination)として性格づける。この「結合」という語は、「神仏習合」の「習合」を英訳するにあたって、以前の「混濁」(syncretism)に代えて、彼が採用した言葉である。「混濁」が、個々に代えて、彼が採用した組み合わせのもとに結合しあっている、というモデルである。グラバートによれば当初この結合においては仏と菩薩とが支配的な位置を占めていたが、後には、「カミ」の方に重点が移つたという(一九八八、二六五頁)。グラバートが発見したのは、神仏の習合は、山王神と天台宗の三諦の同一視のように、言葉の上での理想ならびに形式的な類似に根ざすと同時に、制度的・経済的・政治的な考慮にも根ざしている、とい

うことであつた(一九八七)。グラバートは一般化され「日吉神道」や「伊勢神道」といった特定の事象に重点を置き、その個別の習合のシンボル体系を固有の地理的コンテキストの中で研究することの必要性を強調している。春日社と興福寺という寺社複合体に関する彼の最近の研究(一九九二)はこの方法論をよく示している。

仏教のあらゆる面を網羅しているわけではない。たとえば、浄土真宗や日蓮宗のある宗派のように、ときどき単に言葉の上だけのこととはいえ、カミ信仰の重みを趣小化しているものもある。日本における仏教とカミ信仰・道教・シャーマニズムその他の要素との多様な相互作用を探究することは、将来ますます重要となることだろう。

鎌倉仏教の再評価

日本と同様、アメリカの研究者もほかの時代に比べて鎌倉時代に焦点をあててきた。初期の研究は、いわゆる「鎌倉新仏教」の祖師の生涯と教説に焦点をあてている。たとえばアルフレッド・ブルーム (Alfred Bloom) の『親鸞研究』(一九六七)をはじめとしたいくつかの研究は、いまも古典として参照されている。鎌倉仏教に対する関心は衰えることなく続いているが、この数年の間に方法論については根本的な見直しがあつた。

一九八〇年に出版された大きな影響を与えた論文の中で、ジェイムス・フォード (James Ford) は、長年採用されてきたプロキスタントの宗教改革との類比は鎌倉新仏

とはいえず、彼自身が注意するように、このモデルが日本のである」というものである(一九九二、二五六頁)。

「日本の宗教性は、仏教でも神道でもなく、総合的なもの(八四)。グラバートが提案する、より正確なモデルは、歴史にさかのぼつて投影されたのであるという(一九九二)。「仏教」と「神道」というカテゴリーが近代以前の日本治時代の神仏分離に由来するものであり、その結果、二三(二四頁)。一方、グラバートによると、それは明のカタクリーが影響したからであるという(一九八九、たとえば神道)という対立項を立てるといった西洋宗教学たのは、「世界宗教」(たとえば仏教)と「原始宗教」(たとえば神道)という対立項を立てるといった西洋宗教学者が仏教と神道とを別々のものとして取り扱おうとしてマクアリンによると、かつて日本・西洋を問わず、研究(一九九二)はこの方法論をよく示している。

教を理解するための正確なモデルを提供しない、と論じている。彼はまた「新仏教」は実際のところ室町時代までは有力な教団ではなかったことに注目し、「鎌倉仏教」を柴西・道元・法然・親鸞・日蓮のそれぞれを祖師とする五つの宗派よつてのみ規定するのは不適当であると指摘する。彼自身は、「旧」仏教と「新」仏教の区別を超え、両者に共通する新しい発展を説明するようなモデルを提示している。とりわけ彼が注意をうながすのは、実践の簡素化・新しい宗教組織の形態・新しい布教のテクニックといった共通の特徴である。

フォード論文の登場によつて、「宗教改革」との類似というモデルはほぼ放棄され、鎌倉新仏教の祖師たちの研究は彼らの生きた中世日本の歴史のコンテキストに重点を置くようになった。たとえばジェイムズ・ドビンズ (James Dobson) は、鎌倉新仏教の祖師たち——とりわけ道元と親鸞——を「哲学者」として扱おうとする近代的傾向を批判している。ドビンズの目から見ると、こうした動向は、道元や親鸞の思想の重要性に注意を促す一方、それを中世の宗教文化から引き離し抽象化してしまふものである。彼自身の最近の研究の大部分は、そう

判や中世日本宗教における夢と観想の役割をも主題としている。ジャネット・グッドウイン (Janet Goodwin) は、勧進活動を通じて既成寺院がいかに仏教の大衆化に寄与したかを調査している (一九九四)。ジャクリーン・ストーン (Jacqueline Stone) は、現在、中古天台本覚論の研究に従事している。最近では、顕密体制論と中世日本社会におけるその意義についての故黒田俊雄の著作によつて、多くのアメリカの学者が鎌倉仏教理解を改めることになった。鎌倉仏教研究における黒田教授の影響は、今後、顕著にあらわれてくるであろう。

新しい鎌倉仏教研究の代表的なものは、リチャード・K・ペイン (Richard K. Payne) 編の論文集の中に見られる。これはクロウ・インズ (Crowe Innes) とハワイ大出版部から近刊の予定である。その序論の中で、ペインは仏教史への「廻行的」(regressive) アプローチを非難している。廻行的のアプローチとは、現在における重要な現象の源泉としてのみ過去を扱うような (たとえば、たまたま現在、浄土教・禅宗・日蓮宗が影響力を持つているという理由から、鎌倉時代をそれらの宗派が生まれた時代としてのみ見るような) やり方である。それ

したコンテキストの再構築に焦点をあてている。たとえば、彼は新仏教が祖師信仰と結びつけられた新しい霊場を作ることによつていかに定着し、制度化しえたかということに注意をうながしている (一九九一)。鎌倉新仏教の祖師をコンテキストの中に位置づけるすぐれた研究としては、カール・ビールフェルト (Carl Birsefeld) の道元研究も挙げられる (一九八五、一九八八)。彼は、禅の実践についての道元の思想をそれをつづけた伝記的・文献的・イデオロギイ的背景の面から精査している。ここ数年の間に、新仏教以外の鎌倉仏教の諸側面を研究することにも関心が持たれるようになった。そうした試みの先駆をなしたのはロバート・モレル (Robert Morrell) である。彼は「旧仏教」の僧侶たちが墮落している影響力がなかったというよく知られた戯画的な図式を崩そうと努力している。彼の『鎌倉仏教——非主流派の報告』(Kamakura Buddhism: A Minority Report) には、慈円・覚海・明恵・貞慶その他の人物についての論稿が含まれている。さらに最近では、ジョージ・タナベ (George Tanabe) が明恵についての研究書を出版した (一九九二)。これはまた、『専修念仏運動への批

仏教のイデオロギイの側面

長い間、仏教の歴史は、生死の苦惱からの個人の解脱

や仏の境地の獲得といった実存的問題に関わる仏教思想・教理の歴史として描き出されてきた。個人の解脱つねに仏教の中心の関心事であったのはもちろんであるが、仏教を社会的・制度的・文化的なコンテキストの中で理解するという目的からすれば、教理的・実存的な問題に研究の焦点を合わせるだけでは適切ではないことが明らかになってきた。最近では、アメリカの学者の中で、仏教のイデオロギイとしての面に関する研究を始める者が出てきた。ここで言う「イデオロギイ」とは、特定の集団や制度によつて主張される権力や権威を支持したり、あるいは逆に、それに対抗するための言説のことである。

最近の例としては、近代日本におけるナショナルイズムの興起と西洋からの挑戦に対応する必要性というコンセプトの中で、仏教のイデオロギイ的な次元を検討した二つの研究がある。その一つは、明治時代の慶仏聖教に對する仏教徒の対応を扱ったジエイムズ・ケテラール (James Keetear) の研究 (一九九〇) である。ケテラールは明治仏教の知的指導者たちがつたレトリック上の戦略 (rhetorical strategy) を検討する。その戦略は、「仏教は旧弊な外来の迷信であり社会の進歩の妨げである」という非難に反論し、國家建設の課題に見事に適合した「近代仏教」へと自分たちの伝統を首尾よく作り変えるために用いられたものである。「慶仏聖教」後の仏教徒は、自分たちの伝統が普遍的・世界的・進歩的なものであり、しかも同時に、それが日本の伝統と文化を模範的に表現するものであると主張した。ケテラールはこのような主張を、特定の政治的・歴史的要請に対するイデオロギイ的な応答であると分析し、とりわけそれは、仏教が維新後の近代日本にとって適切な宗教であること、を仏教徒が緊急に証明する必要があったこと、西洋の覇権に日本が抵抗する必要のあったこととに対応するも

のであつたとしている。

もう一つの例は、「禪と日本のナショナルイズム」 (The Zen or Japanese Nationalism) と題するロバート・シャープ (Robert Sharf) の論考である。その中で彼は、鈴木大拙や久松真一といった学者によつて西洋に紹介された禪のイデオロギイ的な側面を考察している。この場合の禪 (シャープが論じるように、これは日本の禪寺の僧院生活の伝統とはかなり異なつたものである) は、無時間的な実在——ないしは「永遠の現在」——の「直接経験」として説明されている。「直接経験」が、西洋人には未知のアジアの精神性——とりわけ日本の禪——の特色であることを主張するために、鈴木たちがどのようなにして西田幾多郎の「純粹經驗」というカタゴリと、フリードリヒ・シュライエルマツハ、ルドルフ・オットー、ウリアム・ジエイムズなどの西洋の宗教学者がとなえた「宗教經驗」の概念とを取り入れたかを、シャープは示している。シャープの述べるところによると、鈴木は禪は、西洋文化の挑戦に対する近代日本の知的応答というコンセプトの中で理解されなければならぬ。仏教研究の領域以外では、西洋知識人の禪理解は素朴で

最近の例として、近代日本におけるナショナルイズムの興起と西洋からの挑戦に対応する必要性というコンセプトの中で、仏教のイデオロギイ的な次元を検討した二つの研究がある。その一つは、明治時代の慶仏聖教に對する仏教徒の対応を扱ったジエイムズ・ケテラール (James Keetear) の研究 (一九九〇) である。ケテラールは明治仏教の知的指導者たちがつたレトリック上の戦略 (rhetorical strategy) を検討する。その戦略は、「仏教は旧弊な外来の迷信であり社会の進歩の妨げである」という非難に反論し、國家建設の課題に見事に適合した「近代仏教」へと自分たちの伝統を首尾よく作り変えるために用いられたものである。「慶仏聖教」後の仏教徒は、自分たちの伝統が普遍的・世界的・進歩的なものであり、しかも同時に、それが日本の伝統と文化を模範的に表現するものであると主張した。ケテラールはこのような主張を、特定の政治的・歴史的要請に対するイデオロギイ的な応答であると分析し、とりわけそれは、仏教が維新後の近代日本にとって適切な宗教であること、を仏教徒が緊急に証明する必要があったこと、西洋の覇権に日本が抵抗する必要のあったこととに対応するも

非歴史的なものになりがちである。それ故、シャープのような研究はそれに対する有効な修正として役立つであろう。

ほかの時代に目を向けると、ウリアム・デイル (William Deal) の『法華經』と正当化のレトリック (The Lotus Sutra and the Rhetoric of Legitimation) が十一世紀における日本仏教のイデオロギイの側面を探っている。デイルが検討しているのは、『栄花物語』と『法華驗記』の中で『法華經』がどのように異なった用いられ方をしているか、ということである。すなわち、一方では宮廷貴族の、もう一方では法華聖の、互いにひどく異なつた世界観と生き方を正当化するために『法華經』が利用されているのである。デイルの分析によると、「正当化のレトリック」は類比 (analogy) という文学的仕掛けに依存している。『栄花物語』においては、藤原氏の覇権を正当化するために、藤原道長と『法華經』の仏陀とが暗黙のうちに類比されている。一方、鎮源の説話集 (『法華驗記』) では、聖の禁欲的な生活に価値を付与し、その生活がすでに暗示している、宮廷と結びついた仏教界の主流派への批判に根拠を与えるため、

心をも反映している。

仏教研究と日本文字との関係についての新しい学際的関係に明らかし、両者の関係を説明することは、われわれ思想史研究者にとつて固有の課題となることであろう。

イデオロギイ的なものへの関心は、従来のように一方的で理想化されたかたちで教理に重点を置くことに対しては必須の修正であるが、仏教のすべての側面が権威と權力の問題に還元されるわけでもない。仏教思想のイデオロギイ的な次元と教義論的ないし実存的次元とをともに明らかにし、両者の関係を説明することは、われわれ思想史研究者にとつて固有の課題となることであろう。

日本仏教を理解する上でコンテクストをより考慮しようとするのは、以下に示すのは、日本仏教への学際的アプローチ、すなわちほかの領域から得られた知見を仏教に取り入れた研究の、最近の例である。

二 学際的アプローチ

学問分野をまたがった研究の中で、最近クロス・ア  
ツアされてきた実り豊かな領域としては、仏教学と美術  
史との間の研究がある。美術史の側では、多くの研究者  
が、仏教美術を単に美術的な価値のみ評価することを  
乗り越えて、それが持つ儀礼的・社会的コンテキストを  
探求することによって創作を取り囲む環境を解明しはじ  
めている。ごく最近の例としてはドナルド・マツカラム  
(Donald McCallum) の『善光寺とその画像』(Zenkyō  
and His Icon) がある。マツカラムは、宗教的画像を主  
として美術的鑑賞の対象として見る方法論を意図的に捨  
てて、その代わりに帰依の対象としての宗教的機能に焦  
点をあてている。その結果は、善光寺の阿彌陀三尊信仰  
について、その縁起・関連した儀礼・遍歴する聖による  
日本全国への普及の仕方などを含む徹底した研究となっ  
たのである。このような研究は、伝統的な美術史の領域  
を越えて、仏教学者やほかの日本宗教の研究者をも引き  
つけるものである。このように日本の仏教美術に対して  
社会的・文化的なコンテキストを問うアプローチをし  
たものとしては、ミミ・イエングルグクサワフン (Zimji

Kiengpruksavan) の一連の論稿 (一九九一、一九九三、  
一九九三a) も挙げられるだろう。これは中尊寺の構造  
とその画像を取り上げ、寺院とその美術とが奥州藤原氏  
の政策とどう関連しているかを研究したものである。イ  
エングルグクサワフンの調査が示しているのは、中尊寺の  
仏教美術と建築はいくつかの側面を平安京の貴族の美学  
から借りているとはいえず、同時にそれをその土地に固有  
の、おそらくより古い蝦夷の文化に由来する要素と一体  
化させているということである。そして、仏教がどのよ  
うにしてある特定の地域性の中で適応していたのかを研  
究することの必要性を強調している。ウイラ・タナベ  
(Wira Tanabe) の『法華経の絵画』(Paintings of the  
Lotus Sutra) もまた注目すべきものである。ここでは、  
経の押し絵・宝塔曼陀羅・その他の形態の『法華経』に  
関連した美術が、平安時代の『法華経』と結びついた信  
仰と宗教実践―写経・埋経・逆修など―というより  
広い枠組みの中に位置づけられている。

他方、仏教学者の側もまた、自分たちの学問領域の伝  
統的な枠を越えて、近代以前の日本の宗教生活を再構成  
するという努力の中で仏教美術を証拠物件として考察す

ることをはじめている。昨年、カナダのオンタリオにあ  
るマクマスタ大学で、「寺院生活というコンテキスト  
の中の日本の仏像」(The Japanese Buddhist Icon in  
Its Monastic Context) をテーマとした国際会議が行な  
われたが、これは仏教学と美術史の分野における研究者  
の領域横断的な交流を促進することを主眼としている。  
発表原稿は近々出版の予定であるが、この会議はそもそ  
も美術史家エリザベス・ホートン・シャープ (Elizabeth  
Horton Sharp) と仏教学者I・グリフィス・フォ  
ーク (J. Griffiths Foyle)、ロバート・シャープによる  
頂相についての共同研究から生まれたものである。この  
ような領域横断的な交流から得られる利点は次第に明ら  
かになるであろうし、このような作業はこれからの趨勢  
となっていくであろう。

仏教学と美術史の出会いから生まれた一つの鍵となる  
方法論的洞察は、簡単に言えば、近代的な学問における  
「美術」と「宗教」の領域の分離は近代以前の日本の実  
態には適合しない、ということである。「流出する足跡」  
(Flowing Traces) (サンプォート (Safford)、ラフル  
ーア (LaFleur)、ナガトミ (Nagatomi) 編) は、仏教

と日本の美術・文学・演劇についての最近刊行された論  
集であるが、「本地垂迹」(“focusing traces” は「垂迹」  
の訳語) という語で示される仏とカミとの関係と同様に、  
宗教と芸術とが一体であることを前提としている。編者  
たちが示唆するのは、中世の芸術は「より高い」宗教的  
真実の二次的で劣った表現ではなく、それが拙く聖なる  
真実に関与し具現化するものとみなされていた、という  
ことである。

この見解によって、従来仏教学者の領分とは考えられ  
ていなかった大量の資料が日本仏教の研究者に開放さ  
れることになった。このように学問領域を超えることに  
よって待たれる成果は、ウイリアム・ラフルーア (Wiri-  
liam LaFleur) の『言葉の業』(The Karma of Words)  
によく示されている。ここでは、藤原俊成・鴨長明・世  
阿弥の作品をはじめとする近代以前の文学作品が研究さ  
れ、それらが提供する仏教についての知見―教理や文  
献としてのではなく、ラフルーアが中世日本人の経験の  
中心にあると考える「エピステーメー」(episteme) な  
いし世界理解の仕方としての―が追究されている。宗  
教と文学との関連についての関心は、仏教文学であるこ

とが明白な作品の翻訳、たとえばロバート・モレルの『沙石集』やエドワード・カメンス(Edward Kears)の『三宝絵』・『冥心和歌集』の翻訳によつても刺激されている。

### 日本仏教の中の女性

大部分の仏教研究は男性の立場から記述されてきたし、多くの場合、教理的文献を製作し仏教教団を支配してきたのも男性だということ、ほとんど言うまでもないことである。しかし、女性もまた仏教徒であつたし、西洋において学問分野として女性学(women studies)が登場したことは、脇田晴子や西口順子といった日本人研究者の業績とともに、日本仏教における女性の役割についての関心を強めた。このような関心から、現在入手可能な資料から女性の声を復元するのみでなく、新しい資料を探し求める動きも生まれた。パーバラ・ルイシュ(Barbara Ruijs)は、小峯和明(現、立教大学・石川力山(駒沢大学)および国文学研究資料館との共同研究で、中世にまでさかのぼる記録を持つ日本の尼寺の古文書調査を最近始めた。この「尼寺調査」は門跡尼寺であ

る大聖寺と宝鏡寺の古文書目録を作ることから始まつた。両寺とも十三世紀の無外如大禪尼と結びついており、ルイシュは彼女のことを英語圏の学界で紹介した(一九九三)。また、ルイシュはアメリカでの同僚であるアン・マスコヴァ(Ann Lazrove)とユイコ・ヤンポルスキー(Уико Ямпольскы)とともに、このような調査のため

のデータベースをコンソピア大学の中世日本研究所で作成中である。その内容は現在までのところ、東京大学史料編纂所所蔵の大聖寺・宝鏡寺関連文書の写真複写である。このようなプロジェクトは、近代以前における女性仏教徒の寺院生活を再構成しようとする研究者にとつて計り知れない財産を提供することになるだろう。ルイシュは同時に、「ীগレット・チャイルズ(Ingaret Giles)とともに、近代以前の日本仏教における女性についての論稿と翻訳からなる二巻の書物を編集集中である。この本はミシガン大学日本研究センターから近刊の予定で、この分野における近年の業績の集成である。

すでによく認識されていることであるが、仏教は平等主義的な側面と女性嫌悪的な側面との両方を有している。日本の女性の視点からは仏教の歴史はどのように見える

のだろうか。この分野の研究は未だ準備段階にあるが、すでに以下のような女性と仏教の複雑で両義的な関係が示唆されている。すなわち、一般に仏教教団が性的なヒエラルキーを強化するように作用していた中で、個々の女性たちは仏教の保護者として振舞い、かつ仏教に個人的な救済を求めたということである。

### 仏教とポストモダニズム

近年、仏教の分野と一括して「ポストモダニズム」と呼ばれる新しい形式の文芸批評や社会理論との結合を目指す試みがある。仏教の哲学的研究においては、これはしばしばポストモダン的な見解と仏教思想との並行関係を発見するという形をとっている。たとえば、ステイヴ・オーティン(Steve Oien)(一九九五)はフランクスの哲学者であるジャック・デリダの脱構築(デイクonstrakshon)——現実における絶対的損点やテクニクにおける固定的・本質的な意味の存在を否定する——と、禅における「空」という概念——オーティンはこれを日本の伝統的美学をはじめとし、西谷啓治の哲学に至るまでのさまざまな分野を性格づけるものとする——と

「ポストモダニズム」が単に思想史(この大部分は西洋の思想史であるが)の流れの中の一つのエピソードではなく、文化を超えて異なつた時代にも見いだされる思考の構造ないし様式であるならば、ポストモダンの思考の非本質主義的精神とは正反対に、「ポストモダニズム」というカテゴリーを本質化してしまふことになりはしないであろうか。デイクonstrakshonと中世日本の禅との外見的な類似性はそれぞれその歴史のコンテクストの中でどの程度まで試験に耐えるのだろうか。

より興味深いのは(歴史家の眼から見て)、「ポストモダン」的な分析の様式——とりわけ言語・言説・テクニク——の働きに関する——を日本仏教の歴史に適用しようという最近の試みである。このようなプロジェクトの重要

な例はベルナルド（バーナード）・フォーレル（Bernard Gore）の最近の著作である。たとえば彼の『即時性のレトリック』（Rhetoric of Immediacy）は、古今の禪の擁護者によって即時的な悟り—ないし「漸悟」に対する「頓悟」—として性格づけられた「純粹な」本質的な「ないし」もどもの「禪」という伝統的概念に疑問を投げかけ（より適切には「脱構築して」）いる。古いモデルでは、禪の伝統において儀礼や礼拝の実践が歴史的に存在していることは、大衆的便法—いわゆる「方便」—もしくは本来純粹であつた伝統の墮落と—いふことで説明されている。他方、フォーレルのアプローチによれば、即時的な悟りとはレトリック上の戦略であり、それが存立するためには、まさに自らが乗り越えたと称する「漸次的な」ないし「媒介的な」実践に依存するのである。それはちょうど、大乘仏教的な弁証法において、「真諦」が「俗諦」に依存するのと同様の仕方である。このように即時的な悟りについての禪の主張を、禪の伝統の「本質」としてよりも「レトリック」として分析することによって、フォーレルはこれまで詳細に研究されたことのほとんどなかつた禪仏教の諸側面—呪術

### 三 仏教哲学瞥見

この分野について論じるには私は適任ではないが、アメリカにおける日本仏教の哲学的研究について簡単に記しておこう。いくつかの例外（たいてい親鸞を扱う）を除いて、この領域の研究はほとんど独占的に道元と京都学派に焦点をあててきた。この意味では、初めて道元を「哲学者」として規定した和辻哲郎の遺産を彼らは受け継いでいるように見える—必ずしも彼らの諸解が和辻にしたがっているというわけではないにしても。哲学的な道元研究の中心を占めるのは、仏性・無常・有時についでに道元の教説であるように思われる。これらの概念を、実存的な問題であると同時に、形而上学ないしは実在の存在論的構造にかかわるものとして理解する研究者もいる。一方、これらを中心として経験の現象学という点

的な実践・寺院での儀礼・聖なる遺物や図像の崇拜など—をまじめな学問的考察のために開拓することができただのである。近代以前の日本仏教の素材に対して「ポストモダン」的な方法論的アプローチを適用したほかの例としては、ステイヴン・ハイン（Steven Hein）が近年の文芸批評における成果をもちいて道元の公案の用法を分析している（一九九四）。

ポストモダンの批評理論を適用することは、日本仏教の研究者が他分野の研究者たちと対話するのに役立つ。しかし、この分野の中で究極的な効用はいまだ論争的となつていいる。ある人々は、この方法を新鮮な視角—とりわけ、教義的な言説の基礎にあるイデオロギイ的な問題設定を暴露する仕方や、それが提供する「テキストは固定した、ないし論争の余地のない」「真実の」解釈を持ち得る」という觀念からの解放—という点から評価している。他の人々は、西洋の特定の解釈の様式をそれをあてはめることが適切ではない可能性のある資料に押しつけることになる、あるいは、我々が未だ十分に詳細な知識を持っていない近代以前の日本仏教の文献にそれを適用するには時期尚早かもしれない、という

から考へる研究者（カスリス・カズリス、一九八一、六一—六五）もいる。シエナイ（Shenoi、一九八五）もいる。道元を比較哲学的に取り扱っている例もある。彼の思想をハイデッガーと比較した書物が二冊書かれている（ハイン（Hein）、一九八五。スタムボム（Stambom）、一九九〇）。京都学派もまた、多くの翻訳・検討・比較研究の対象となつてきた。この領域で活躍している学者としては、D・A・ディルワース（D・A・Dilworth）、ジョン・マラルド（John Maraldo）、ステイヴ・オーティン（Austin）、タイツ・ウツン（海野大徳）、ミチコ・ユサ（Michiko Yusa）、デイル・ライト（Dale Wright）などがある。

### 四 新しい領野の開拓

哲学として仏教を研究することには、西洋の学界において哲学がヨーロッパ中心に偏向していることを修正し、アジアの思想家の真意に注意を向けさせる大きな可能性を持つ。禪以外の日本仏教の知的伝統についても同様の研究が行なわれることが期待される。

そのほか、新しい学問的領野の開拓という見出しのも

Bibliography  
 1985 "Recarving the Dragon: History and Dogma in the Study of Dogen." In William R. LaFleur, ed., 1985.  
 1988 *Dogen's Manuals of Zen Meditation*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.  
 BLOOM, Alfred  
 1967 *Shinran's Gospel of Pure Grace*. Tucson, AZ: University of Arizona Press.  
 BODIFORD, William M.  
 1993 *Medieval Soto Zen*. Honolulu: University of Hawaii Press/Kuroda Institute.  
 COLCUTT, Martin  
 1981 *Five Mountains: The Rinzaï Zen Monastic Institution*

究を始めている者もいる。現在では、仏教に根ざした新宗教がここ数年学問的な関心を引いている。また、現代社会における既成仏教教団について調査したいくつかの学位論文が現在進行中である。

この十年の間にアメリカにおける日本仏教研究は、必ずしも成熟したが、さらに前進していかなくてはならない。日本の研究者との対話と共同作業が増加することを期待している。

とに研究成果をまとめることができるだろう。従来西洋人物についての研究書が近年出版されている。注目すべき例としては以下のようものがあげられる。ケネス・クランプト (Kenneth Kraft) による大燈の研究 (一九九〇) は、大燈による著語の発展とそれが後の臨濟宗の伝統に対して持つ意義に多く注意を払っている。マイナー・ロジャーズとアン・ロジャーズ (Minor and Ann Rogers) の蓮如についての著作 (一九九一) もまた、今日の浄土真宗にまで及ぶ蓮如の遺産の影響を探究している。重要な人物について進行中の研究としては、ポール・グロリアー (Paul Groner) による良源の研究がある。これは同時に天台宗の論議の伝統についての綿密な記述をも含んでいる。

日本仏教の歴史の中の大きな伝統や問題に関する調査も増大している。初期の例としては、臨濟宗の五山体制の文化と政治についてのマイケル・コルカット (Michael Colicchi) の研究 (一九八二) や、十六世紀における仏教と國家の關係の変化を扱ったニール・マクアリンの著作 (一九八四) がある。より最近のものとしては、

*in Medieval Japan*. Cambridge: Harvard University Press.  
 DEAL, William E.  
 1993 "The Lotus Sutra and the Rhetoric of Legitimation in Eleventh-Century Japanese Buddhism." *Japanese Journal of Religious Studies* 20/4: 261-91.  
 DOBBINS, James  
 1989 *Jodo Shinshu: Shin Buddhism in Medieval Japan*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.  
 1991 "Envisioning Kamakura Buddhism." *Supplement to the May 1991 Issue of the Japanese Religions Bulletin*: 1-11.  
 FAURE, Bernard  
 1991 *The Rhetoric of Immediacy: A Cultural Critique of Chan/Zen Buddhism*. Princeton, NJ: Princeton University Press.  
 FOARD, James L.  
 1980 "In Search of a Lost Reformation: A Reconsideration of Kamakura Buddhism." *Japanese Journal of Religions Studies* 7/4: 261-91.  
 FU, Charles Wei-hsun and HEINE, Steven, eds.  
 1995 *Japan in Traditional and Postmodern Perspectives*. Albany: New York State University Press.  
 GOODWIN, Janet R.  
 1994 *Alms and Vagabonds: Buddhist Temples and Popular Patronage in Medieval Japan*. Honolulu: University of Hawaii Press.  
 GRAPARD, Allan G.

親鸞から蓮如を経ての浄土真宗についてのジエイムズ・ドビンスの研究 (一九八九) や中世の曹洞禪についての非常に詳細なウリアム・ボディアフオート (William Bodiford) の研究 (一九九三) がある。この二つの研究は特定の宗派の研究にあたって宗相を中心とするアプローチをやめ、親鸞や道元の死後、浄土真宗や曹洞宗の伝統がいかにして制度化し、新しい形態の組織・教授・解釈——しばしば宗相には知られていなかった——を発展させたか、せながら、環境の変化に対応することに成功したのか、ということを探究している。このような研究が続けられるとともに、西洋では従来ほとんど研究されたことなかつた諸宗——たとえば真言宗——や仏教の諸宗に共通する問題についても研究されることが望まれる。

現在までのところ、アメリカの日本仏教研究は、平安時代と中世に焦点をあててきたが、この年代的な幅は急速に拡大しつつある。これからの数年間に、近世の仏教についていくつもの研究が出版されることになるはずである。とくに若い学者の中には江戸時代の仏教を「墮落」とする長い間のレトリックに挑戦して、仏教の大衆の形態と近代的宗字の体系化の双方に注意しながら、探

1984 "Japan's Ignored Cultural Revolution: The Separation of Shinto and Buddhist Divinities in Meiji (*shinbutsu bunrei*) and a Case Study: Tomomine." *History of Religions Studies* 23/3: 240-65.

1987 "Linguistic Cubism—A Singularity of Pluralism in the Sannō Cult." *Japanese Journal of Religious Studies* 14/2-3: 211-34.

1988 "Institution, Ritual and Ideology: The Twenty-Two Shrine-Temple Multiplexes of Heian Japan." *History of Religions* 27/3: 246-69.

1992 *The Protocol of the Gods: A Study of the Kasuga Cult in Japanese History*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

1985 *The Existential and Ontological Dimensions of Time in Heidegger and Dōgen*. Albany: State University of New York Press.

1994 *Dōgen and the Koan Tradition: A Tale of Two Shōbōgenzō Texts*. Albany: State University of New York Press.

KAMENS, Edward  
1988 *The Three Jewels: A Study and Translation of Minamoto Tamemori's Sanbō-e*. Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan.

1990 *The Buddhist Poetry of the Great Kamo Priestess: Daisuin Seishi and Hossin Wakashū*. Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan.

Pre-Modern Japanese Religion. *Japanese Journal of Religious Studies* 16/1: 3-40.

MORRELL, Robert E.  
1985 *Sand and Pebbles (Shasetsushū): The Tales of Myūtsu Ichien, a Voice for Phrastrism in Kamakura Buddhism*. Albany: State University of New York Press.

1987 *Kamakura Buddhism: A Minority Report*. Berkeley, CA: Asian Humanities Press.

ODIN, Steve  
1995 "Derrida and the Decentered Universe of Chan/Zen." In FU and HEINE, eds, pp. 1-24.

ROGERS, Minor and Ann  
1991 *Kenryo: The Second Founder of Shin Buddhism*. Berkeley, CA: Asian Humanities Press.

RUCH, Barbara  
1993 "The Other Side of Culture in Medieval Japan." *Cambridge History of Japan*. Cambridge, New York, Melbourne and Sydney: Cambridge University Press. Vol. 3, pp. 500-43.

SANFORD, James H., LAFLEUR, William R. and NAGA-TOMI, Masatoshi, eds.  
1992 *Flowing Traces: Buddhism in the Literary and Visual Arts of Japan*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

SHANER, David Edward  
1985 *The Bodily Mind Experience in Japanese Buddhism: A Phenomenological Study of Kukai and Dōgen*. Albany: State University of New York Press.

for Japanese Studies, University of Michigan.

KASULIS, Thomas  
1981 *Zen Action, Zen Person*. Honolulu: University of Hawaii Press.

KETTLAAR, James E.  
1990 *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and Its Persecution*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

KIM, Hee-Jin  
1975 *Dōgen Kigen: Mystical Realist*. Tucson, AZ: University of Arizona Press.

KRAFT, Kenneth  
1992 *Eloquent Zen: Daitō and Early Japanese Zen*. Honolulu: University of Hawaii Press.

LAFLEUR, William R.  
1983 *The Karma of Words: Buddhism and the Literary Arts in Medieval Japan*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

1985 (Ed.) *Dōgen Studies*. Honolulu: University of Hawaii Press/Kuroda Institute.

MCCALLUM, Donald F.  
1992 *Zenhoji and Its Icon: A Study in Medieval Japanese Religious Art*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

McMULLIN, Neil F.  
1984 *Buddhism and the State in Sixteenth-Century Japan*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

1989 "History and Historiographical Issues in the Study of Dōgen's *Shōbōgenzō*." *Religious Studies* 20/1: 55-72.

(フリスノ大学・宗教学)

SHARF, Robert H.  
1993 "The Zen of Japanese Nationalism." *History of Religions* 33-1: 1-43.

STAMBAUGH, Joan  
1990 *Impermanence is Buddha Nature: Dōgen's Understanding of Temporality*. Honolulu: University of Hawaii Press.

TANABE, Jr., George J.  
1992 *Myō the Dreamkeeper: Fantasy and Knowledge in Early Kamakura Buddhism*. Harvard: Council on East Asian Studies, Harvard University.

TANABE, Willia J.  
1988 *Paintings of the Lotus Sutra*. New York and Tokyo: Weatherhill.

YIENGPURUKSAWAN, Mimi  
1991 "In My Image: The Ichiji Kimrin Statue at Chūsonji." *Monumenta Nipponica* 46/3: 329-47.

1993 "The House of Gold: Fujiwara Kiyohira's Konjiki-dō." *Monumenta Nipponica* 48/1: 33-52.

1993a "Downloading the Lotus: From the Public to the Private at Kiyohira's Chūsonji." *Japanese Journal of Religious Studies* 20/1: 55-72.